

## 自律的学習者を育成するための英語教材の研究

兼岩 明日香

### ◎ 第1章 研究概要

2020年2月28日、政府より新型コロナウイルス感染症拡大防止のための臨時休校要請を受け、全国の教育機関は対面での授業を中止せざるを得なくなった。この影響を受け、子どもたちは家庭での自学自習を余儀なくされた。その中で、子どもたちは自ら学びに向かうことの難しさや、学び続けることへの困難さを感じたことだろう。また、コロナ禍において筆者自身もまた一学習者として、ひとりの状態で学習に取り組む困難さを経験した。このことが、筆者自身の「ひとりでも学び続けるための力」つまり「自律的に学ぶ力」について研究しようと考えた背景に関わる。このような状況下において教育機関は、新たな学びの形を急遽準備し、インターネット環境を利用したオンライン授業や課題提示や提出への工夫を行った。しかし、学びの形を変化させ、このコロナ禍に順応していくことも重要だが、学びの根幹にある変わらないものを見直し、継続していく必要もあるだろう。そこで筆者は、先述した「学習者の自律性」を学校教育の中で養っていくべき「変わらないもの」とし、その必要性やその育成方法を、文献研究をはじめとした理論研究および調査を通して明らかにしている。

また、コロナウイルス禍に学校に通うことができなかった児童・生徒の家庭学習を支えたのが、教材・教具の存在である（文科省, 2021）。言い換えると、この状況下において、学習者と学習教材の結びつきが強くなったということだ。

筆者は、学習者には学校教育を終えた後も、身の回りにある学習教材とともに自ら学ぶ力が必要であると考え、自律的学習者を育成するための実践に活用できる教材制作理論を見出すことが有意義であると考えた。

本研究は、研究主題にもあるように「自律的学習者」および、「副教材」の二つの観点から展開されている。そこで筆者は、教材論に関わる「教授学の三角形」（深澤, 2010 図1）という考え方を参考にしながら、本研究を進めている。

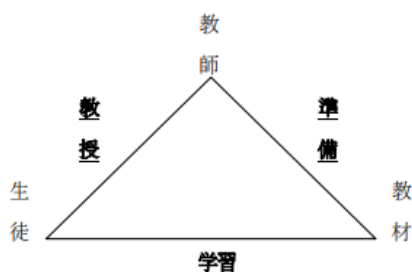


図1 授業の「三角形モデル」の教授学 深澤（2010）を基に筆者作成

## ○ 研究仮説

筆者は、本研究の開始当初、図1の授業の「三角形モデル」の教授学のあり方に問題意識を抱いていた。それは、先述したようなコロナ禍の全国一斉休校のもとで、教師が従来のように教室の中で授業をすること、そして生徒が授業を受けることが叶わなくなったからだ。論文中では先述した状況下において、教師と生徒が結びつく関係が弱くなったことを説明している。授業において教師が頂点に置かれ、生徒に直接「教授」を行うことよりも、生徒が教師から与えられた教材とともに学習に取り組む中で、教材との結びつきがより強くなったと考察する。

そこで筆者は、図1で示した「授業の「三角形モデル」の教授学」の再検討を行い、コロナ禍を経た現在における、教師・生徒・教材の関係性は、図2に示すような形になると仮定した。これは、生徒と教材の結びつきの中に教師が支援を行うという関係図である。つまり、生徒が教材を使用する相互関係の中に、教員が行う生徒に対する自律的に学び続けるための支援の導入することで、教材使用を通して自律的な学習者を育成するのではないだろうか。

筆者は、本仮説検証のために、図1および図2の中に示されている、教師、生徒および英語の教材を制作する出版社に対してインタビュー調査や参与観察調査を実施し、教材を使用して自律的な学習者を育成する方法を明らかにしている。

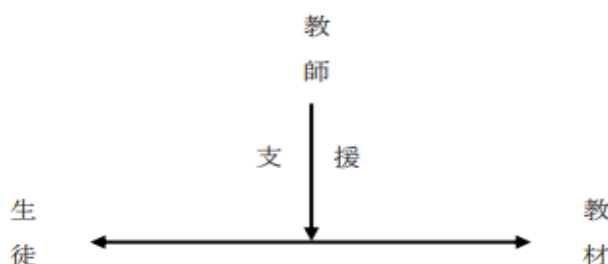


図2 教授学の三角形の再検討

## ◎ 第2章 学校教育と自律的学習

本研究における自律的学習の定義は、自分にどのような学習が必要であるかを見極め、学習のゴールを決め、その時間に必要な教材を選択し、自分の不得意な部分を認識し、適切な学習のペースや時間配分を決め、学習の進捗具合をモニターし、学習評価することができる学習と定められている（白畑他, 1999 樋口・高橋, 2019）。

加えて、自律的な学習者を育成するためには、学習者が基々持っている「オートノミー（自律性）」を拡張させることが必要である（白畑他, 1999 p.25, 35）。さらに、この「オートノミー」を拡張させるためには、学習者に「意味のある学習経験」というフィルターを通過することが求められ、そのためには自己調整学習<sup>1</sup>と教師の支援が必要であるという。

<sup>1</sup> 自己調整学習：目標を設定する、ストラテジーを取捨選択する、自身の取り組みを振り返る、動機を維持するなどが学習活動の中でできること。

論文中では、自己調整学習の考え方が自律性育成のための主たる要素として扱われている。自己調整学習は「予見の段階」「遂行コントロールの段階」そして「自己省察の段階」から構成されている。筆者はその要素らを、中田（2016）、樋口・高橋（2019）そして白畑他（1999）を参考にしながら、動機付け、学習ストラテジーおよび、振り返りといった具体的な学習行動と学習支援に関する文言に置き換え、論文中で使用している。

本章において特筆すべき点は、教員をはじめとした指導者中心の学習から学習者中心の学習に学習形態が変化する過程そして、学習者が達成感を得ることが学習者の自律性を育成することには欠かせないということだ。学習者が学習の過程と結果に焦点を当てることができるような支援が欠かせないと考えられる。文献調査および、インタビュー調査から得られた、教員からの具体的な支援例は、本論文の終章である教育的示唆の中で整理し述べられている。

### ◎ 第3章 学習教材に関わる理論研究および、出版社と教員の視点

本研究において「教材」とは、英語の教科書準拠ワークブックやドリルと定められている。そこで筆者は、教材中において学習者の自律性を育成する仕掛けがあるかということ、英語の副教材を制作する出版社 A と、英語の一般書および、学習参考書を制作する出版社 B に対してインタビュー調査または参与観察調査を通して明らかにした。具体的には、教材の中に自律的学習を支える、動機付け、学習ストラテジーそして振り返りの要素らが含まれているか、その工夫が教材中にどのように表れているかという点を調査した。さらに、教材の活用状況について、中学校・高等学校の英語科教員に対してインタビュー調査を実施した。

各調査の結果から特筆すべきことは二点ある。一点目は、学習者一人ひとりの実情に適するような教材があるとよいということだ。その根拠としては、教員に対するインタビュー調査の結果から、自作教材を作成している教員がいること。そして教材作成のメリットとして、生徒のレベルや興味等を加味したものを使用できることが、学習者の動機付け等に関係することが明らかになったからだ。また二点目に、教材の使用方法に関して、教員が学習者に対して強い強制力を持たないため、生徒が自分自身でどのようにどれくらい使用するかを選択しなければならない現状がある。そのような中で、「何を、どれくらい取り組めば良いかわからない」と感じる生徒も少なくないだろう。これらのことから、教材中に学習者のガイドになる仕掛けがあると学習者中心の学習に対する足場掛<sup>2</sup>になるだろうということが挙げられる。

### ◎ 第4章 教員の支援や学習教材に対する学習者の視点

前章までの内容において、教員や教材がどのように学習者の自律性を高めるかという点について考察されている。それらを基に、本章では、先述した自律性を高めるための支援に

---

<sup>2</sup> 足場掛 (scaffolding) : 親や教師などが、子どもや学習者に対して行う支援。学習者が一人では解決できないが、他者の支援があれば解決できる場合、その支援は、建設作業を支える足場 (scaffold) の用に機能するため、このように呼ばれている。

対して学習者はどのように捉えているかについて調査を実施した。つまり、前章までで得た、自律的学習者を育成するための教員から学習者に対する支援例や、教材中の工夫が、学習者の自己調整学習や一人の状態学ぶ状況に効果的であるか否かということについて調査を実施した。さらに、どのような支援や教材が理想であるかということもまた調査した。

特筆すべき点として、授業を通して教員が学習者を観察し個々に応じた支援ができるようにすることの必要性と、学習に対する達成感が学習者の動機付けにつながるということが明らかになった。さらに、学習者が自分自身に適した学習方法を知ることや、今の学びを次の学びに繋げるためには、学習過程の振り返りとそれに対する教員からのフィードバック等が必要であり、教材中にその機能があることが望ましいこともまた明らかになった。

## ◎ 第5章 教育的示唆

終章である本章では、学習者が自律的に学ぶための教員の支援のあり方および、どのような教材があれば自律的学習者を育成することができるかという2つの軸から、研究目的に対する考察が整理されている。そこでは、生徒の自律性を育成することに関して両者の観点から、学習者が達成感を感じることができることと、振り返りの必要性が欠かせないことが示唆として見出された。さらにこれからは、上述してきた支援がデジタル媒体を用いて実現することができないかという点について論文中で検討されている。

## ○ 今後の展望と課題

本研究では、自律的学習者を育成するための教員の支援の必要性が明らかになり、それを教材にどのように活かすかという点まで明らかすることができた。ただこのことが実用可能であるかということと、自律的学習者の育成に対して効果を示すかは未知数である。したがって、今後は、筆者自身が英語の授業実践を通す中で更なる示唆を見出していきたい。そのためには、授業実践者である筆者と学習者である生徒に対して、一定期間での生徒の変化の観察をはじめとした質的調査および、教材使用による英語への意欲などの情意面変化と英語力の推移に関わる量的調査を実施し、次の研究へと繋げたい。

## ○ 主要参考文献

- ◇ 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則 (1999) 『英語教育用語辞典 第3版』東京：大修館書店
- ◇ 中田賀之 (2015) 『自分で学んでいける生徒を育てる・学習者オートノミーへの挑戦-』.東京：ひつじ書房
- ◇ 樋口忠彦・高橋一幸 (2019) 『Q&A 高校英語 指導法辞典 現場の悩み 133 に答える』. 東京：教育出版深澤(2010)
- ◇ 深澤広明 (2010) 「授業の「三角形モデル」の教授学」. 『現代教育科学』8月号.No.647 第53巻. 東京：明治図書出版文部科学省 (2021) 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して(答申)【本文】  
[https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt\\_syoto02-000012321\\_2-4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf) (閲覧日 2022年9月2日)
- ◇ Barry.J.Zimmerman 編.塚野州一・伊藤宗達 監訳 (2014) 『自己調整学習ハンドブック』京都：北大路書房